卒論「樋口一葉研究」

生井沢美津子

多くの女流作家が登場した明治二十年代、その殆どが片手間であった中で、最初の女流職業作家として活躍し、文学史に名を残したのが樋口一葉である。彼女は、優れた日記と、「たけくらべ」「にごりえ」「十三夜」などの小説の作家として有名である。

一葉は、負けず嫌いであり、おとなしい風姿や挙止のかげには、激しい情熱を持っていた。人よりぬきん出たいと願ったり「国家の大本」となりたいことを、日記に書いている。女侠的な一葉を日記に見つけるのは、さして困難ではない。

しかし、それらは、一葉への自分自身のポーズであった。つまり、実際の一葉はもっと弱かったのではないだろうか、というのが私の考えである。女戸主として樋口家を背負い、家の重圧をひしひしと感じ、結婚も諦め、女ゆえの不利を体験し、世の中に一人きりだという孤独感を抱いていた。そして、ともすると絶望的になってしまう心のよりどころとして、小説を書き日記を綴ったのだと思う。

私は、晩年の作品に漂う諦念・虚無感に注目して、その要因となった宿世意識について、作品と日記を対比させながら考察してみた。

現実を嫌悪し、「人間として生きたい」「出世をしたい」と思うお関（「十三夜」）やお力（「にごりえ」）も、自己拡大にまでは及ばず、結局は、諦念へと落ち込んで行く。彼らは、家や、逃れ難い宿世を背負っているのである。これは、一葉自身が背負っていたことがらでもあった。個より家が重んぜられた時代、女戸主として家に縛られ生きた一葉が、身をもって感じた悲劇が「十三夜」であった。また、兄やいとこの結核による死が、一葉の心に宿世意識を植えつけた。これが、「にごりえ」などに反映されていると思う。

一葉が、生涯、貧乏に苦しんだのは周知の通りである。小説が売れ、高名になっても、生活は楽にならなかった。母や妹の愚痴を聞くにつけ、世の不合理さ、女ゆえの不利を痛感したのだろう。「私は洗ひ張りに倦きが来て、最うお妾でも何でも宜い」と言う「わかれ道」のお京のせりふは、ある時の一葉の本心だったのではなかったろうかと思う。「文学界」の青年達にかこまれ、一流文士としてもてはやされながらも、一葉は孤独であった。誰も自分を理解してくれない、世の中に一人きりだという思いは、一葉を次第に虚無的にして行った。晩年の作品に漂う虚無感は、とりもなおさず、一葉自身のものだったのである。

（教育学部小学校教員養成課程国文選修）